

解答

問一 A 精査 B 定時 C 建前（建て前） D 神経

問二 感情とはいろんな人が、いろんな人生を生きてきた中で生まれたものであり、たとえば「好き」という感情ひとつとっても、人それぞれニュアンスは異なる。ところが、言葉はその違いを正確に表せるほど柔軟なものではないので、感情を言葉にすると細かな違いはないものとされ、「好き」という言葉で示される感情は、万人に共通のものとなってしまう。

問三 インターネットの世界には、雰囲気が優先されるような「場」ではなく、相手に理解してもらうために、わかりやすい「話し言葉」を使う必要がない。「私」は誰かにわかつてもらわなければならないという重圧を感じることなく、無視できない重みを感じさせる「書き言葉」を使って、一心不乱に自分の思いを吐き出すことができた。

問四 「私」のことによく知らない読者が、「私」の詩を読み、自分と同じ言葉を話しているのに、あきらかに、自分とは違う言葉選びがされていることに気づき、その「異物感」にぐっときたり、嫌悪感を抱いたりする。それが「わかるなさ」というものに「私」が宿った瞬間であり、私の言葉が「私」を伝えた瞬間である。読者はその「私」の言葉を容易に理解することはできないが、だからこそ強く残る手触りがある。その感触が、共感や、わかつてもう、ということを追いかけ、忘れ始めていた自分の「本当」が、奥にまだ眠っていることを読者自身が思い起こすきっかけとなるのではないか。

問一 A 道楽 B 年配（年輩） C 素養

問二 ア 足 イ 頬

問三 ジーンズで新しいスタートを切った「鶴来」に、自分がいる意味はないと考えたりようは、これまでと違う人生を始めるために、それまで世話になつた取引先への挨拶回りの途中、神戸に立ち寄った。そこで偶然見かけた「海会堂書店」に入り、すらりと並んだ船の本に目を見張り、その充実ぶりに驚かされたのをきっかけに、幼いころ、「大きくなつたら船に乗つて、自由に、どこへでも行けばいい」と母親に言われたことを思い出し、これほどまでに船の本をそろえた書店の社長がどんな人なのか、興味を持つた。

問四 絵画を扱う仕事をするためには、画家が命懸けで向き合つたものに気づかなければならぬ。それは自分の生き方そのものが問われているのと同じだという畠田さんの話を聞き、美術の素養を身につけるために専門雑誌を読んだり、展覧会に足を運んだりするよりも、無名で異端で辺境に眠つてゐる才能を見出す目を養わなければならない。

問五 遠い昔、幼い頃に浅草から出てきた祖母が、社長をお払い箱になつた男と、神戸の片隅で開いたギャラリーは二人の「居場所」であるとともに、畠田さんが見出した画家たちの作品の「居場所」もある。人生を、人と人との不思議な縁で繋ぐ「居場所」というものの存在を感慨深く思った。